

台北・北京における和古書及び 絵画資料についての覚え書き

小峯 和明

立教大学

1 台湾大学所蔵の和古書をめぐって

国文学研究資料館文献資料部に在任中、文部省科学研究費（海外学術研究）によって、1985年に台湾大学の資料調査に赴いた。当時の文献資料部長の福田秀一教授を中心とし、旧台北帝大の国語国文研究室の和古書の悉皆調査を行った。調査は84年からはじまり、私は85年の秋に三週間ほど滞在した。国語国文研究室旧蔵本の調査はすでに鳥居フミ子・金子和正・須田悦生各氏によって試みられており、それらの後追い調査のかたちになったが、仮目録を作成、科研費の報告書として「台湾大学研究図書館所蔵・旧台北帝大文政学部国語国文研究室本仮目録」を出した。台湾大学側との折衝が不調に終わり、「仮目録」を公開することはできなかった。この目録がいつの日か日の目を見ることがあればと願っている。

旧国語国文研究室の和古書は損傷がいちじるしく、白衣にマスクをかけて書誌調査を行ったほどで、水をかぶったためか紙がくっついてはがれないものも多く、虫損のはなはだしいものは我々の間で「豊鯛」本などと呼んでいた。しかし、近世文学を中心にきわめて質の高いコレクションであり、写本の揃いの『岷江入楚』、『和漢朗詠集私注』、『徒然草』、絵巻の『田村麻呂』、版本『伊曾保物語』などが個人的には印象に残っている。また、調査の余裕はなかったが、戦前の活字本もそのまま所蔵されており、きわめて資料価値が高いと思われる。

滞在中、たまたま滞留中の金文京氏（京大人文研、当時は慶応大）のお世話で国立中央図書館にも赴き、版本『三国伝記』や刊本『白氏文集』などを閲覧させていただいた。台湾大本にくらべて保存のよかったことが印象に残っている。

なお、近年、国文学研究資料館で再び旧植民地所蔵資料の調査が行われているようで、いずれ総合的な資料の様相が掌握できるようになるであろう。

2 台湾故宮博物院の和古書をめぐって

2000年春に、85年の折りには機会がなかった台湾故宮博物院図書館に赴き、和古書を閲覧させていただいた。楊守敬旧蔵で名高い資料群である。予約なしでいきなり行ってすぐ閲覧

できるシステムは本当にありがたいものだった。ここはかつて慶応大学斯道文庫の阿部隆一氏を中心に調査が実施され（『中国訪書志』汲古書院、後に著作集）、それをもとに目録も出されているが、索引がないので検索がやや不便である。

ここでは室町期写本『歌行詩』と近世期の『冥報記』を閲覧。前者は今テーマとしている中世の未来記の代表作『野馬台詩』の最も流布した注釈書である。書名の由来は『長恨歌』『琵琶行』『野馬台詩』がセットになっており、それぞれの末尾一字を合わせたことによる。この三作品がなぜ合体されたのか、詳細は不明だが、前二作は有名な白楽天の代表作で、『野馬台詩』のみ六朝時代の宝誌和尚の作とされる。奈良時代の遣唐使で有名な吉備真備がこれを解説し、日本に持ち帰る話が『吉備大臣入唐絵巻』などにみえる。

本書の書誌の概要は以下の通り。室町期写本一冊。外題・長恨歌 琵琶行 野馬台。表紙・無文素紙。料紙・楮紙。18丁。縦26.8、横19.2cm。楊守敬の印あり。裏打ち補修あり。一冊の三分の一はコピーしてよいとのことで、『野馬台詩』の部分だけコピーさせていただいた。斯道文庫にもマイクロフィルムがあるが鮮明ではない。

『野馬台詩』とは五言二十四句の短い詩であるが、それにさまざまな注釈が書き加えられており、詩句に続いてつけられた本文注と欄外に加筆された欄外注の二層からなる。日本の未来、終末を予見したテキストとされ、天皇百代で日本が滅びる百王思想の典拠ともされる。詩句の表現が注釈によってまざまざと日本の歴史をよみがえらせる興味深いテキストである（拙稿「野馬台詩の言語宇宙」『思想』1993年7月）。

残念ながら故宮本は欄外の注釈の書き入れが多くはないが、それでも小野篁が竹から生まれた話をはじめ、ヲノゴロ島・秋津島・敷島・扶桑など日本の七種の異名等々、いくつか注目すべき注釈がみられる（これらの注も諸本によって差異がある）。貴重な写本である。

また、後者の『冥報記』は、唐の唐臨の撰になる仏教説話集で、冥途蘇生譚や仏經の靈驗譚を中心に構成される。すでに『日本靈異記』に名がみえ、『今昔物語集』の典拠としても知られる。中国では逸書となり、『法苑珠林』や『太平広記』などに逸文がみられる。一方、日本では古鈔本が複数伝存し、承和五年（838）、唐人書写本を靈巖寺の円行が将来した高山寺本（卷子三卷）、長治二年（1105）写の前田家尊経閣文庫本（三卷一帖）、12世紀写とされる知恩院本などがある。三本ともに説話の出入りがあり、知恩院本が最も話数が少なく、前田家本が最も多い。前田家本は別系統と考えられる。前二本はいずれも尊経閣叢刊などの複製があったが、近時、高山寺本は『高山寺資料叢書』（東大出版会）に所収され、前田家本は勉誠社版の影印本があたりしく出た。知恩院本はすでに『学苑』（昭和女子大・1993年）に翻刻されている（但し、書誌の詳細は不明）。また、集中的に『冥報記』を利用し翻訳した『今昔物語集』は、前田家本系の誤写や脱文に共通し、前田家本に最も近い本文によることは明白である（拙著『今昔物語集の形成と構造』笠間書院・1985年）。

故宮本は近世末期写本。識語から三縁山本の影写本で寛永寺で写されたものであることが知られる。書誌は前記阿部著書に詳しいので省略する。三縁山とは芝の増上寺のこと。増上寺の鶉養徹定寮の蔵本をさす。楊守敬『日本訪書志』には、「三縁山寺保元間写本」とされる。鶉養徹定は後に知恩院に移るから知恩院本はこの三縁山本であろうとされる。この推定は阿

部著書以来の定説となっている。しかし、翻刻された知恩院本と故宫本を対校すると、訓点の有無など若干の相違がある。たとえば故宫本では、中巻第11条の冒頭の人物「中書令岑文本」に「誦観音品得死報」という傍注が付き、中巻第8条の末尾の割注の最後に「誦観音品鎖忽自解」とあるのに対して、知恩院本の翻刻にはみられない。

中国でも高山寺本などをもとに復元研究が進んでいるが（古小説叢刊『冥報記 広異記』中華書局、李劍国『唐五代志怪伝奇叙録』南開大学出版社）、前田家本や故宫本など諸本への目配りがまだ充分ではなく、近年ようやく研究が動き出している段階である（李銘敬『『冥報記』的古抄本与伝承』『文献季刊』2000年7月3期）。

知恩院本の紹介が不十分であるため、故宫本との関連を完全に立証するに至らないが、故宫本が知恩院本の転写本であることはほぼ確実であろう。まだ充分検討する余裕がないが、故宫本の詳細な紹介をいずれ試みたいと考えている。

『冥報記』は唐代に成立して日本に影響を及ぼし、しかも平安期の写本が伝存する貴重な作品であり、思想的にも仏教と道教の習合した泰山の冥途世界がうかがえるなど興味はつきない。今後の日中共同研究の足がかりを担うテキストのひとつといえよう。

3 北京所在の和古書をめぐって

1999年春、北京日本学研究中心に出講した折り、北京国家図書館及び北京大学図書館所蔵の和古書を閲覧する機会に恵まれた。前者は貴重書室で閲覧したが、目録もなく、中国刊本と混在しているため、カード検索に頼るほかなかったし、出納に時間がかかり、きわめて効率がよくなかった。しかし、漢籍にまぎれて日本の写本がいくつかあるのを見ることができた。今その折りのメモを紛失してしまい、詳しい情報が記憶にないが、『黄帝内経』類の中世の医書注釈書を転写したものであった。

また北京大学図書館ではすでに李玉編『北京大学図書館日本版古籍目録』（北京大学出版社・1995年）が刊行されており、これにもとづいていくつか閲覧することができた。大半は版本であるが、一部写本も含まれている。たとえば、天台宗の事相口伝を集成した『阿婆縛抄』の写本があり、奥書は天保七年（1836）で七冊存し、本奥書は元禄十六年（1703）である。この本奥書には比叡山横川の兜率谷鶏頭院の嚴覚の名があった。この嚴覚は、以前調査していた早稲田大学総合図書館の所蔵する教林文庫の中核をなす人物である。教林文庫の名は、もともと蔵書のあった天台宗の教林坊（近江国湖東）にちなむ（織田信長に焼き討ちされる）。17世紀後半から18世紀にかけて活躍した学僧で、多くの写本を残している（弟子に写させる場合も多い）。独特の筆跡なのですぐにそれとわかり、仙台の仙岳院の調査の折り、偶然にもこの嚴覚の直筆本が出てきたのには驚かされた。同じ天台宗の縁ではあろうが、経緯はどうあれ比叡山で写された本が近世期に遠く仙台まで運ばれていたのである。その歴然たる事実に感嘆させられる。人とともに書物が動く歴史をまざまざと感じさせられた。

この嚴覚の名はワシントンの議会図書館の資料にも出てきた。1998年より立教大学の同僚渡辺憲司氏を中心に議会図書館の和古書の調査を進めているが、遇目した嘉永二年（1849）写

の『灌頂面授抄』の本奥書に嚴覚の名が出てきたのである。しかもこの本は、1907年にアメリカのイエール大学教授朝河貫一が収集したコレクションのひとつであった。朝河貫一は収集した日本の和古書をイエール大学とワシントン議会図書館の双方に納めた。和本でありながら表紙が洋装のハードカバーに改装されているのが特徴で、明治期当時の写字生の写した写本が多いことでも注目される。これも国文学研究資料館在任中、1987～89年にイエール大学の朝河コレクションの調査を行っていたので、この議会図書館の調査とあわせて、ようやくイエールとワシントン双方にある朝河コレクションの全貌が把握できるようになった。ちなみにイエール大学の貴重書収集で知られるバイネッキライブラリには、日本イエール協会が出資した別のコレクションもある（これも直接集めたのは朝河である）。話がアメリカ調査にそれだが、間接的な本奥書とはいえ、北京・アメリカの双方で嚴覚の名を見つけたことに不思議な因縁をおぼえずにはいられなかった。

北京での調査はきわめて不十分なものとどまったので、今後も機会をとらえて詳しく見ていきたいと願っている。本との出会いは前世の縁としかいいようのない機縁で結ばれており、思いもかけないつながりをみせてくれる。書物の背後から人のつらなりもみえてくるのである。

4 絵画資料としての絵巻・絵本をめぐって

2月の国際研究集会の折り、最後に報告された劉曉路氏の「中国に秘蔵された日本芸術品について」は、中国に所蔵される日本美術の全貌を総括的に紹介された大変有益で刺激的な報告であった。ただ、日頃から関心を持っている文学と絵画の相関について、特に絵巻や絵本への配慮があまりみられないことを感じたので、若干のコメントを加えたい。

日本の8～19世紀にかけて、おびただしい物語の絵巻や絵本が作られた。世界的にみてもその質量はかなり水準が高いはずであるが、日本でも充分関心が払われてこなかった。文学研究ではつとに注目されてはいたが、『源氏物語絵巻』など12世紀の著名なものをのぞいて、かならずしも絵そのものへの着目は充分ではなかった。ましてや美術研究ではほとんど無視されていたに等しかった。近年、絵画が歴史史料として注目されるようになって、だいたい方向が変わってきたといえる。

とりわけ15世紀以降の物語群はお伽草子とか室町時代物語とか呼ばれ、とくに絵のついたものは「奈良絵本」と呼ばれる。「奈良絵」は奈良の絵草子屋にちなむものだが、それをテクニカルタームとして使うには問題が多く、さしたる根拠は認められない。古本屋が好んで使い、「奈良絵本」というだけで、絵巻や絵本の形態も区別せず、とにかく高い値段がつくのが現状である。それを廃するためにも「奈良絵本」の呼称は避けた方がよい。

物語本文の多くは『室町時代物語大成』（角川書店）に翻刻されたが、絵は完全に省略されてしまった。また、完結からだいたい時間が経過しており、その後に発見紹介された新出の物語もすくなくない。いずれにしても、ずいぶん関心は集まってきているが、絵巻や絵本の絵画研究はいちじるしく遅れているのが現状である。

以下に問題点を整理しておく、まず第一に絵巻は形態が巻物であっても、物語性の有無によって絵巻と図巻とに区別すべきこと（双方の呼称の使い分けはまだ一般化してはいないが）。第二に原本と模写本のヒエラルキーを廃し、すべてのテキストを等価値にみるべきこと。第三に絵巻や絵本は文芸と絵画の一方に偏することなく双方の視点から統合的にみるべきこと、の3点があげられる。

第一は、形態は絵巻であっても物語絵巻は詞書をともなうのが通例であり（詞書のない場合もあるが）、動植物や祭礼、年中行事などを列挙する絵巻は「図巻」として区別すべきだと考える。ストーリー性のあるなしは絵巻ジャンルをとらえる上で重要な意味をもち、たんに巻物の形態だけで一括すべきではない。つまりストーリー性のある絵巻こそが日本の巻物の特性であり、中国や西洋にもみられない特徴なのである。図巻類は中国にも多く、また日本にも多いが、物語絵巻こそ日本絵巻の最大の特色であるとみてよい。

第二は、美術史の観点から作者のわかる一級品だけが重視され、底辺や裾野は無視されてきた。その結果一級品の模写本は価値のないものとされたが、模写という行為もまたひとつの表現行為であって、一個の独立したテキストとして意義を復権させる必要がある。ことに近世の住吉派や狩野派は前代の作品の模写をよく行っており、模写本という名の不当性からテキストを救出しなくてはならない。

第三は、絵巻は通常、美術品として扱われがちだが、物語性のあるものは文学でもある。そのためにも図巻と絵巻の呼称の使い分けを主張しているわけで、双方にまたがるジャンルとして総合的にみていくことがもとめられている。また、図巻類であっても絵画の情報は文学とも切っても切れない関係にあり、横断的、学際的な視点からの扱いや解説が要請される。また、絵巻が美術品として扱われる結果、一級品を除いて屏風絵や掛幅図など大型の作品にくらべてあまり対象にならないケースが多い。

次に問題になるのが、版本の絵入り本である（版本の絵巻もあるが今は略す）。17世紀以降、近世期の出版文化が確立すると、次第に絵入り本が増えてくる。墨だけの墨印から華麗な多色刷り本までさまざまであり、歌麿や北斎など著名な浮世絵師らが描く場合もすくなくない。近世の刷り物というと、一枚物のいわゆる浮世絵ばかりが目されるが、絵入り版本もまた実に精巧で色彩がみごとであり、一枚物の浮世絵と等価値にみるべきものであろう。したがって、浮世絵のコレクションのあるところにはこうした多色刷りの絵入り本があるとみてよい。一枚物も版本もまた同時に問題にすべきなのである。

こうした絵巻や絵本、絵入り版本の類はジャポニズムや廃仏毀釈、第二次世界大戦後の混乱などを契機に海外に伝来したものが多い。どちらかというとき欧米に多くみられる。絵のあるものが好まれたことにもよるだろう。言語より絵のもつイメージやメッセージは通じやすいからである。西洋人のコレクションが多いのもそのためであろう。欧米で私が調査したのは、ダブリンのチェスタービーティーライブラリー、ニューヨークのパブリックライブラリーのスペンサーコレクション、ハーバードのサックラーミュージアム、ロンドンの大英図書館などで、いずれも有数の絵巻や絵本のコレクションで知られる。

中国や台湾にはこうした個人の収集による絵巻・絵本のコレクションはあまりないだろう

が、今回の劉氏のお話で美術品が実にたくさん伝存することをうかがって、おおいに蒙がひらかれた。その折りに見せていただいたスライドに、刷り物の『百人一首』の歌仙絵があった。こうした絵画と文芸にまたがるものがまだまだたくさん出てくると思われる。絵巻や絵本の出現におおいに期待したい。

北京の道観で有名な白雲観に展示されていた道教の経典で、文字と挿し絵風の絵が交互に出てくる巻物があってびっくりした。中国の巻物は大半が物語性のない図巻類とっていたので、文字と絵画が交差する卷子本の存在を知って認識をあらたにした。日本以外で制作された詞書と絵画が交差する物語絵巻の出現を心待ちにしているので、ぜひご教示いただければ幸いである。おおきな紙や布を手を持って縦にひろげる絵解き用のものはインドなどでも見られるが、横にひろげてながめる形態で、しかも物語本文の詞書もついている形式は、意外にも日本以外には知られないのである。

文字と絵画の交差する絵巻や絵本こそ日本文化の核のひとつであり（マンガやアニメの原点でもある）、日本人が残したもの、中国で制作されたものなどの経緯のいかんを問わず、中国での絵巻の出現を楽しみにしている。こうした絵巻や絵本類の絵を集めて、将来は絵画データベースを作成する必要があるだろう。そのためにも中国における絵画資料の調査は急務であると思われる。